

ぼくが戦争に行く

反時代的な即興論文

寺山修司



寺山修司

反時代的な即興論文

ぼくが戦争に行くとき



読売新聞社

ぼくが戦争に行くとき
——反時代的な即興論文——

定価 700円

昭和44年8月1日 第1刷

昭和50年3月31日 第4刷

著者 寺山修司

編集人 松田延夫

発行人 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町1-7-1 (〒100)

大阪市北区野崎町77 (〒530)

北九州市小倉北区明和町1の11 (〒802)

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

©, SHUJI TERAYAMA, 1969

0036-500651-8715

もくじ

1

ぼくの内なる戦場

風に吹かれて 反戦青年委員会

希望という病気 東京大学

泣くな妹よ 笹崎ボクシングジム

書物のそとで ロマン・ロランと現代の会

2

キャンパスでの演説

一九六八年、関西学院大学でのラリー

3

三分間の思想

1 長距離ランナーの挫折

2 エロスのな反逆

89

3 私怨をもって政治を超えられるか

92

4 ロビンソン宣言

95

5 土産は、はずれ馬券

97

6 便所の中の「星の王子さま」

100

7 地下テレビのための予告

103

4

スクリーン・オデッセー

105

地平線の起源について「先生」殺しの思想

107

言葉が眠る時に目覚める世界とは何か

113

石井輝男の残酷映画

おまえの「古事記」をこそ 神々の深き欲望

118

思想としてのカサノヴァ

「禁じられた情事の森」の狩人

124

海で哲学しない奴があるか

ジャン・リュック・ゴダール氏

129

「悲劇の死」の今日

135

劇は終わるものだろうか？

「気狂いピエロ」よ、さらば

143

私のサイキック・ジャニー

5

同世代の戦士たち

149

伊藤繁論

151

佐々木竹見論

160

釜本邦茂論

169

田辺清論

176

6

時代精神と癌

185

青少年のための賭博学入門

- 1 幸運を信じる心
 - 2 もう一つの推理
 - 3 影なき馬の影
 - 4 キタノオーザのたてがみ
 - 5 あるノミ屋の死
 - 6 過去を故郷と呼ぶな
- アパシーの荒野
- 魂の乱交の機会を
- ある家出少年への手紙

250 244 229 218 212 205 199 193 187

1 ぼくの内なる戦場

風に吹かれて

反戦青年委員会

土曜日の夜の楽しみは、競馬新聞の早刷り版をポケットに入れたまま、場末の深夜映画館で見る東映のヤクザ映画である。

高倉健が「男には一生に一度ぐらい、負けるとわかつてる戦いに出かけて行かなきゃなんねえ時があるんだ」と言い捨てて、権力者への、非合理で勝ち目のない喧嘩けんかに出かけてゆく。やがてスクリーンには総天然色の血しぶきが飛び散るのである。

深夜映画の主人公たちは、たいてい、反抗するときは一人か（たとえば組織に属していても）、仲間を巻き込むまいとするか、どっちかであるから、これはグループ・パワーを必要としている時代感情を反映しているとはいえないだろう。

それなのに、東映深夜映画が大衆の圧倒的な支持を受けているのはなぜか？

中学時代に、港の近くのボクシング・ジムへ通っていた私に「暴力はいいが、権力はいけない

よ」と教えてくれたのは、朝鮮人の李さんであった。しかし、長い間私は、権力と暴力とが、どう違っているのかを知ることが出来なかったし、知ろうとしなかった。

上京して何年かたって、東京・新宿の歌舞伎町の酒場でアルバイトをしていたころ、近所の古本屋で見つけたソレルの書物で「力が上から下へ働く時に権力となり、下から上に働く時には暴力となるのだ」と書いてあるのを読んで、私は、なるほどと合点した。上とか下とかいうのは、単に階級のことだけではなく、体制と反体制の論理でもあり、パワーの規模の問題でもあるのだらう。

一度、私と同年配の極東組員に「そんなにヤクザ映画が好きなら、いつそ組にはいったらどうだ？」と誘われたことがある。その時、私は「愚連隊ってのは、隊だということが性に合わないんだ」といったのを覚えていた。「特定の隊を作って、反抗を集団化してゆく時に、なんだか、すり切れちゃうものがあるような気がするんだ。愚連隊という特別の集団が必要なんじゃなくて、一億総ヤクザ化してゆき、決してパワーなんかにならないってことが、人間的なんだと思うよ」

反戦青年委員会の今日の特色は、従来の組織観で見れば、きわめてアイマイで、その実数も一万人くらいといわれるが、はっきりしたことはわからない、ということである。たしかなことは、その数がどんどんふえていつている、ということくらいのものである。

その沿革は、六五年の日韓闘争のさなかに、総評青対部、社会党青対部、社青同の三者が中心になって『ベトナム戦争反対、日韓条約批准を阻止するための青年委員会』という名のもとに、

民主組織や青年団体に呼びかけた時から始まった。だが当初は、どちらかといえば人単位ではなく団体単位で、中央単産が上から動員してゆくという方向にあり、いわゆる団体共闘的な性格が強し、それが日韓闘争の敗北とともに、少しずつ退潮していった。

「日韓が消えて、ベトナムだけが残る、初めのうちのベトナム反戦活動は、トランジスタラジオを送ったり、医薬品を送ったりするような支援活動や、意思表示だったのが、次第に「内なるベトナム」との戦いとして認識され始めた」（埼玉反戦青年委員会事務局長・村上明夫）のである。

六七年から六八年にかけて、反戦青年委員会が次第に盛り上がりを見せ、羽田、佐世保、横須賀、王子、成田と、彼ら自身が「闘争の渡り鳥」というような根拠地の増殖をしていったことの背後には、彼らの闘争目標が「内なるベトナム」に絞られたことのせいだった、とばかりはいえないものがある。反戦青年委員会が、自らの反戦行動を「自由参加」にし、個人としての主体性を重んじたところに、この自立組織の伸長のもとがあるように思われるからである。

毎日の、おもしろくない仕事。職場での味気ない生活と、生き甲斐を見失いそうになる日常性。そうしたもののなかで、無名のとるに足らないと思われているサラリーマンや労働者が、突然に「月光仮面に変身するチャンス」を持てるというところが、この自立組織の一つの特色である。

昭和四十三年の10・21事件で新宿駅のプラットホームに飛び降り、学生と機動隊のあいだに飛

び散る血を浴びながら反戦を叫び（その時にこそ、生の充足を感じながら）、ケガしてしまい、翌日はケロリとした顔で職場では、

「自転車から落っこちて、ケガしたんだ」とウソをつく。

そのウソの背後には、自分には「もう一つの生活」があるのだという、ひそかな自信があつて、それが彼の反権力意識や自由への衝動を、単なる〈内なるベトナム〉との戦い以上のものまでエスカレーションしているのである。

実際、寒い冬の豚箱入りした反戦労働者をかばって、友人が、

「彼は故郷へ帰っている」

と、勤め先をあざむいていたところ、その寮に刑事がたずねてきてウソがバレてしまい、かばってやった友人までも解雇されてしまった、というエピソードもあるが、こうした時に職場を離れてゆく彼が、もはや、労働と反戦運動とを使い分けてゆく二重生活者としてではなく、一人の「反抗的人間」としての統一的な選択を、人生のなかに持たざるを得なくなるのである。

反戦青年委員会は、いわば相対的平和に突きつけられた疑問符のようなものである。トルコ風^{トルコ風}呂の桃ちゃんにとってベトナム戦争とはなにか？ 高野刑事部長にとってベトナム戦争とはなにか？ ジャイアンツの王にとってベトナム戦争とはなにか？ じゅんとネネにとって……、海洋学者にとって……、ニコニコ質屋にとって……、全電通労働者にとってベトナム戦争とはなに

か？　といったことを、それぞれの生き甲斐とのかかわり合いでとらえた時にだけ、彼らはより大きな社会性を獲得することになるだろう。それは、国家の〈内なるベトナム〉から魂の〈内なるベトナム〉へと、フォーカスを絞りあげてゆく作業にもかかっている。

反戦青年委員会は、今日に至ってようやく、中央単産の上からの動員などを問題としなくなってきた。それは労働組合への幻想を振り切ったところに、自分たちの場を設定するようになってきたからである。「いまの組合じゃ、はいつていますというだけで、なんにもなっていない」という北島三郎ファンの鉄道員の言葉は、実は重要なのだ。

「おまえのところから、十人デモをかけてくれ、という指令がくるんです。そこでクジ引きして、当たって出かけてゆくんですが、前のほうで全学連がハネてるなんて聞いて、こわごとと遠くから見ていて、日当もらって帰ってくる。たまには、おれもゲバ棒持って、いい格好したいな、なんて思うこともあります。ケガしたって組合は、なにもしてくれませんか。結局、日当でおばあちゃんにみやげ買って、家へ帰るだけです」

こうした組合員によって成り立っている愛される組合活動の小市民性、といったことに飽きたりしない人たち、組合デモで市民の後方をヨタヨタしているのではなく、最前線に立って、歴史のなまなましい切断面を見、その変革の証人になりたいと思う人たちによって、反戦青年委員会は維持されている。だが、その現実、彼らの「社会党の青年党員としての、やむにやまれぬ反戦活動」とか「議会政治だけでは変革できない部分への切り込み」といった大義名分、「下り坂の

社会党を盛り返すための各自の内的な覚醒共闘」といった意図にもかかわらず、次第にグループとしてのパワーを管理されかけようとしている。

それは、たとえば社会党、総評らの七〇年安保への共闘プログラムのなかに「反戦青年委員会を加えない」という方針のなかにも見られるものである。「会」ならば「会」らしく組織のスジを通せ、という反体制パワーのなかで反戦青年委員会はオミットされてゆく。

「なぜ、反戦青年委員会の加盟を認めないのか？」

と、私は総評の岩井事務局長に聞いてみた。彼は答えた。「彼らは三派全学連をオブザーバーとしていますからね。あれを整理しろ、といってるんですよ。われわれは、三派の闘争方式を認めていませんからね——。総評、社会党、共産党を打倒目標にしているグループを、オブザーバーに加えて共闘もできん、といっているのですよ」

下り坂の社会党——総評のなから生まれて、それを内から変革してゆこうとめざし、それを個人の主体性の領域まで絞りあげてきたところでの、この上からのシメツケは、彼らを苦しい立場に追い込んでゆくことになるだろう。議会政治だけでの革命は不可能だと了解し合いながらも、まだ大衆に愛されたい、票を集めたい、だからこそ三派全学連との関係を断ち切ってしまいたいとする総評——社会党ラインと、やむにやまれず、三派の助っ人化してゆく反戦青年委員会とのあいだには、大きな断層が生まれようとしている。

反戦青年委員会は、たとえば佐世保では、包囲されかけた三派の学生たちの背後にすわり込ん

で、非武装のまま機動隊の攻撃のバリケードとなった。そこで学生たちは「後ろを心配せずに、前方とだけ交戦していればよかった」というのである。彼らは、闘争の現場での流れ解散などもしなければ、日当も出ない。ただ「反戦」の名のもとに、渡り鳥のように佐世保、王子、成田と、ところを変えながら、その数を増してきたのである。

少年時代、私はクラウゼヴィッツの『戦争論』を愛読した。私は、終わってしまった戦争を惜しみ、あさはかにも「一人で戦争を引き起こすことは可能か」という長詩を書いた。一人で戦争を引き起こしたいというのは、いわば古代帝国時代へのあこがれであって、「国家論」を持たない世代の妄想にすぎないだろう。しかし、一人で……という発想には、パワーぎらいの心情がこめられているのであって、「古代世界におけるアレクサンドリア図書館の放火事件は、一人の男に宿った途方もない虚栄心が、一夜にして人類の文明史上に恐るべき災厄をもたらしうる」（永井陽之助）時代が、かつては存在していたことへの郷愁である。無論、一人で戦争は引き起こすことはできない。平和を取り戻すためには、戦争を引き起こすパワーを、はるかに上回るパワーが必要だということは、目に見えているのである。

千葉の三里塚、冬のなかで傾きかけたポロ小屋がある。通称「団結小屋」と呼ばれるものである。そこにいま、たった一人の青年がたてこもって、寒さに耐えながら反戦活動をしている。小屋の裏口には大関、仁勇といった酒の一升ビンがころがっていて、なかには裸電球が一つぶら下がっているだけである。

青年の名は村上信義（社会党オルグ・葛飾反戦青年委員会）といつて、武蔵野美大出身のことし二十一歳、「団結小屋」にがんばり始めてから、もう三か月にもなる。彼はここでパトロールして、公団側がやってきたらすぐに農民たちと連絡をとって「追い出す」というわけだ。壁には「希望のない今日よりも、絶望の明日を！」と、なぐり書きしてあるのが印象的だ。

「三里塚の農民たちの土地に対する執着は、たいへん保守的なものである。故郷なんてものを捨てた時に、初めて人間は自由になれると思うが、どうか？」

と私が聞くと、村上は「三里塚闘争を、農民と土地の問題としてだけ考えると、保守的なものだということになるでしょう」と答えた。「しかし、これは政治の問題なのです。ここにできる空港にはジャンボーやコンコルドといった超大型、超音速のジェット機が持ち込まれることになっている。SSTジェットなんてのは、重爆撃用ですよ」

「しかし、農民の土着信仰を軍備反対のイデオロギー闘争に利用するのは、どんなものだろうか？ 彼らの自分の土地という感覚こそは、危険なナショナリズムの母となるのではないか」

「たぶん」

と村上はいった。

「しかし、生活している人たちが、あっちへ行け、こっちへ行けといわれるのは愉快なことではないのです。これは誇りの問題でもあります」

「たとえば、それが農村の近代化のために必要なゆがみだとしてもか？」